

特集

座談会「ウィズ、アフターコロナ時代に 求められる学びの姿」

日時：2021年2月4日（木）16時00分～17時30分

参加者：

逸見 敏郎（文学部 教職課程 教授）

木田 英樹（情報システム課（メディアセンター担当）課長補佐）

小田嶋 澄（観光学部観光学科2年次）

司会：

宇野 裕樹（教務部全学共通カリキュラム事務局）

オンライン授業へのそれぞれの取り組み

一約1年前の3月中旬に急遽オンライン授業になることが決まり、授業開始の4月30日まで、短時間で準備を行うことを強いられました。教員、職員、学生、それぞれの当時の状況について教えてください。

逸見 私自身は、オンライン授業については知識も経験値もゼロ状態であり、どのようにスタートしたらいいのか全く分かりませんでした。今までは板書をしながら講義を行うスタイルでしたので、オンライン授業では、そうした従来の授業の概念をひっくり返すところから始めなければなりません。周囲を見ていて今までの授業と同じことをそのままオンライン授業でもやろうとされた先生は、やはり苦勞なさっていた印象があります。また、私は授業で、LMS（学習管理システム：Learning Management System）としてBlackboardを今までも使っていましたが、中には、「立教時間は使ったことがない」「Blackboardって何？」という教員は兼任講師を含めて少なからずいました。

木田 メディアセンターは立教大学の教育研究部門におけるICT環境の整備・運用・推進を担っている部門です。

オンライン授業がスタートする以前も、授業を事前に収録しどこでも閲覧可能な「オンデマンド授業」コンテンツの制作をサポートしたり、池袋キャンパスでの授業を新座キャンパスに配信したり、またその逆を行うなど、「キャンパス内遠隔講義」のサポートもしてきました。

しかし今回は、急遽全学的にオンライン授業の実施が決まり、まったくノウハウがない中立ち向かいました。オンライン授業で使用するツールの選定、そのツールを使って

実際にどのように授業をするのかといったことを日々模索していたことを今でも覚えています。それに加え、オンライン授業に関する講習会の実施やマニュアルの整備、教員や学生からのお問い合わせにも対応してきました。やはり3月、4月は「オンライン授業はどのように実施するのか」という問い合わせが殺到しました。特に4月は件数は1カ月で2,000件以上、多い日は1日300件以上の問い合わせが寄せられました。

小田嶋 1年次生の授業を終え、少し慣れたところで2年次生はもっと楽しみたいと思っていた矢先のオンライン授業の決定でした。

4月以降は家族もリモートワークになり回線の圧迫が心配でしたが、オンライン環境に関しては大きなトラブルもなくスムーズにオンライン授業へ入ることができました。これまで、ノートパソコンは大学への持ち運びのためにコンパクトなものを使っていましたが、小さな画面ではオンライン授業を受けにくいので、両親と相談してモニターを購入し大きな画面を使って授業を受けられるように準備しました。また、SAを担当した科目の業務に就くときは、大学から貸し出された通信端末を借りて対応するようしていました。

－ 4月30日からの授業開始に向けてどのような苦労がありましたか？

木田 本学では、オンライン授業の主なツールとして当初 Google Meet を使う方針でした。先生方から Zoom を使いたいという要望も初期の段階からあったのですが、立教大学ではもともと Google Workspace (当時 G Suite) の教育機関ライセンスを契約しており、立教大学の構成員なら誰でも Google Meet を使えるという事情がありました。授業開始に向けて、マニュアルの作成や先生方に向けた使い方の講習会も実施しましたが、私たち職員は、自ら授業を担当することがないため、Google Meet の授業における使い勝手の良さ悪しについて正確に理解できておらず、本当に手探りの状態でマニュアル整備や講習会を行って参りました。

さまざまな検証をすすめる中、4月初旬に、多くの教員から「やはり Zoom を使いたい」というご要望をいただき、授業開始まで1カ月もない時点で Zoom を導入することに決定しました。

Zoom は一般の利用者に向けてのノウハウはウェブ上にたくさん見つけられるのですが、管理者向けの情報についてはほとんど用意されておらず、学内に導入するにあたって、かなり苦労した覚えがあります。

逸見 私は、春学期に教職課程の授業に加えて全学共通科目総合系科目「現代社会の課題とその関わり方入門－SDGsを手がかりに－」を担当しました。この科目は科目責任者である私以外に、兼任講師やゲスト・スピーカー (以下、GS) をお招きし、複数の教員で運営するコラボレーション科目です。春学期の授業回数が14回から12回に

なったことに伴い、当初 14 名にご登壇いただく予定だったGSを急遽 12 名に変更することになるなど、授業内容の変更とGSの調整に苦慮しました。

また、従来であれば、GSは教室に来て、自らの知識や経験に基づいたお話をさせていただくのですが、オンライン授業となったことにより、オンライン授業を前提としたパワーポイントなど資料作成をお願いしなければなりませんでした。その他にも、オンライン授業の配信方法を理解してもらうために、メディアセンターの解説動画を活用したりしました。

小田嶋 Google Meet や Zoom に関しては、実は4月の頭からゼミで使いはじめていたこともあり、少し慣れた状態で授業を受けることができました。ただ、オンライン授業が始まったばかりの4月、5月あたりは、やはり「キャンパスに行きたい」という気持ちが強くありました。周囲の友人も皆同じように感じていたようです。また、先生が一方的に話し、授業が終わったらリアクションペーパーをBlackboardで提出しておしまいという一連の流れを機械的に感じてしまった部分もあり、オンライン授業に物足りなさを感じ、「これは授業と呼べるものなのだろうか」という気持ちもありました。

逸見 小田嶋さんがおっしゃったように、オンライン授業を行う際には、どうやって双方向性を確保するかという問題もありました。

Google Meet はオンライン授業開始当時の段階では、Zoom でいうブレイクアウトルーム（グループ分け）機能はありませんでした。何ができるかをいろいろと調べ、「Slido」という、リアルタイムで質問や意見発表、ライブ投票ができるクラウドサービスを使うことにしました。スマホでも使えるので、学生には授業前に URL と QR コードを示し、PC やスマホなどから「Slido」上に質問や意見を集め、教員がそれに対して回答することで双方向性を担保しました。

その他にも、GSに授業の内容に関わる事前課題を授業の1週間前に出していただくようお願いし、それをGoogleドライブにアップし学生と共有しました。課題の回答はGoogle Formsで提出、それを授業前に私がまとめてGSに渡し、回答内容を授業に反映していただきました。このようにオンライン環境の中で双方向性を確保できるよう工夫を施しました。

木田 2020年3月に緊急事態宣言が発出され、当時はメディアセンターも原則在宅勤務になり、窓口でのサポートができなくなりました。システムの操作方法は電話やメールではうまく伝えることができません。カウンターに直接来ていただき、パソコンの画面を一緒に見ながらサポートさせていただくのが一番良いのですが、それができないため非常に苦労しました。

先ほど逸見先生から、これまで対面授業でやってきたことをそのままオンラインで行うのは難しいとお話がありました。しかし、中には対面授業で行ってきたことをオンラ

イン授業でも実現したいと仰る先生もいらっしゃったのです。例えば、音楽の科目では、先生が演奏しているシーンをライブ配信したい、DVD や映画などの映像資料をオンラインで配信したいなど、多数の問い合わせが寄せられました。

我々も皆さんの要望に応えるべく技術的な検証をしながらサポートさせていただきましたが、教員によって ICT スキルやオンライン配信環境も異なるため、ハードルが高いことを痛感しました。

秋学期以降はオンライン授業用に教室が開放されることが決まり、オンライン授業の幅を広げることができました。教室であれば使用可能な機材のグレードも上がり、動画や DVD を配信することもできるようになり、環境はかなり整備されたと思います。我々も試行錯誤しながらそうしたノウハウを徐々に積み重ねてきました。

小田嶋 オンライン授業を履修する一方で、春学期と秋学期を通じて、SA としてオンライン授業のサポートをさせていただきました。主な仕事は、オンライン授業の通信環境をチェックすることと、授業後に出欠席を入力することです。

春は先生方も Zoom や立教時間の使い方が分からなかったので、私も一緒に Zoom の使い方をチェックしたり、立教時間を使って出席者の確認をとる方法を調べたりしました。授業が始まる前に何回かオリエンテーションをして「一緒に頑張りましょう」という感じでした。

授業をサポートする立場として、こちらから「こうしたほうがいいのでは？」などご提案することもあり、私も学生ながら先生と一緒に授業を作っていく貴重な体験をさせていただきました。秋は先生方もオンラインのシステムに慣れていらっしゃったように感じました。

逸見 Zoom を使用したオンライン授業では、授業に集中していると、通信環境上いったん退出した学生の再入室に気付かないことがあります。TA や SA に協力してもらいながら、学生の出席のチェックや通信環境の管理など、ある種エンジニア的な役割を担ってもらえると安心ですね。教員がひとりであっちもこっちも気を配るのは限界があるというのは 1 年間の授業を通して思ったことです。小田嶋さんのお話をうかがっていてオンライン授業では TA や SA と一緒に授業を作っていく方法もあるという新しい視点を得ました。



逸見 敏郎

木田 メディアセンターでは、オンライン授業の配信状況の確認サポートをする巡回サービスを提供していましたが、やはりメディアセンターのスタッフだけで全授業をサポートするのは不可能です。

今のお話を聞いて、もう少し学生の協力を仰いで、授業をサポートできれば良かったなと痛感しています。対面の授業であれば教室に直接行ってサポートできると思います。やはりオンラインだと、いつでもどどの先生が授業をしているか全体が把握できません。次年度以降はそうした総合的な情報をどう収集していくかも一つの課題だと思っています。

効率の良い情報共有方法と連絡方法

ーオンライン授業やテレワークという環境になったことで同僚や友人とのコミュニケーションの在り方や情報収集の仕方に変化が生じたと思いますが、皆さんどのように対応されたのでしょうか？

逸見 3月末から4月初旬頃は、先にも述べたとおり「オンライン授業って何？」の状態でしたから、オンライン授業に関して何か情報が出回るたびに教員全員がわーっと飛びつくなど、今振り返ると非常に混乱した状況もあったと思います。例えば授業はYouTubeにあげたほうがいいとか、多くの学生が使用しているLINEのビジネス用途のLINE WORKSを使うといいとか、オンライン授業の観点からは現実味に欠ける情報に右往左往していました。これはその経験を経た今だから言えること、ではありませんが。

そのとき私が一番頼りにしていたのはメディアセンターからの発信でした。しかし途中から、学内他部局からの情報発信も始まったものの、情報が一元化されず、結果的に欲しい情報がどこにあるのか分かりにくくなっていったように思います。その後、全学共通カリキュラム運営センターがオンライン授業に関するナレッジベースの掲示板を立ち上げ、情報をまとめてくださったのはとても参考になりました。

オンライン授業は、ゼロからスタートしなければならないという状況でしたので、授業実施や運営に関わる大学内のサポートシステムが非常に重要でした。

木田 テレワークを行ううえで遠隔でどのように情報共有するのが大きな課題でしたが、メディアセンターでは、業務でMicrosoft Teamsというアプリを試験導入していました。Microsoft Teamsはいわゆるグループチャットツールです。たまたま導入を決めていたものですが非常に有効活用できました。



木田 英樹

メディアセンターの仕事は多岐にわたります。大枠では、問い合わせ対応を担当するヘルプデスク、映像制作や教室の機材サポートを行うAVチーム、教室PC、貸出PC等の運用管理を行うPCチーム、サーバー、ネットワーク、各種システム等のインフラの管理運用

を行うインフラチーム、SPIRIT等のWebサイトを運用するコンテンツチームなど、業務別にチームが動いています。Microsoft Teams上では業務別にグループを作って、それぞれリアルタイムに情報共有していました。業務別に情報が整理され、かつ横断的に把握できるので、メールのように情報が錯綜することもなく非常に役立ちました。

小田嶋 オンライン授業では、多くの先生が事前にBlackboardなどに資料をアップして下さるところがいいと思いました。これまでは授業中にプロジェクターで資料を映し出し、学生はそれを見てメモをとっていました。オンラインでは資料が直接手に入るようになり、プリントアウトしたものに直接書き込みもできますし、復習するのにも便利です。

一方、先生によって連絡方法がBlackboardや立教時間、メールなど、それぞれ違い、戸惑うこともありました。先生がBlackboardでお知らせを発信しても、学生はわざわざBlackboardを見ないとその内容を知ることができません。立教時間とも連携していないので、お知らせが出ていることに気付かないのです。そうしたこともあり、先生が授業の直前にZoomのURLを変更して、それをBlackboardでお知らせしても、気がつかない学生がいて、しばらくZoomに入れられないということも起きていました。

また、Blackboardからのメールの発信者名には先生の名前が入っています。そこでBlackboardからのメールは、先生の名前でラベルをつけて分類し他のメールに紛れないように整理していました。一方、立教時間からのメールの発信者名には「SPIRIT」とだけ入っていて、中身を開かないと内容だけでなく誰からの発信なのかが分かりません。そのためメールを見落としたり件名だけを見て授業に関係ないと判断し、開封しないこともあったかと思います。

逸見 小田嶋さんが言っていた立教時間とBlackboardから送信されるメールの形式の違いについて、学生に周知することは大事だと思います。またメールにラベルを付けて管理するなどの情報管理に関する基礎リテラシーは、すべての学生に伝えておかないと、学生たちが途中で教員からのお知らせを見失って、授業に出席できなくなってしまうたり、課題提出を失念してしまうことも起こってくるのではないかと思います。同じように、我々教員も立教時間やBlackboardから送信されるメールの形態が異なることや、教員の発信した内容が学生にどのような形式で伝わるかなどについて知っておくことは必要なことと思います。

木田 貴重なご意見ありがとうございます。

チーム縦割りで業務を行っている、今回のような有事の際にはうまく回らないことがあります。それを解消する意味でもMicrosoft Teamsをはじめ、現在使用している既存ツールの中にも、授業や他の部署の業務でも活用できるものがあると思います。今後はこのようなノウハウを学内でも共有していきたいですね。その一方で、教員や学生

から「ツールが増えることで負担が増す」という意見もいただいています。これまでメディアセンターは「いろいろなツールを用意するので、各自の判断で使ってください」というスタンスでした。しかしその結果、使用するべきツールに関する情報が分散してしまい、逆に何を使っていいかわからない状況も発生していたかと思います。今後はある程度ツールをスタンダードなものに絞り、一元化を図ることも必要かもしれません。

また、立教時間と Blackboard の使い分けについてはいろいろなお意見をいただいております、我々としても悩ましいところです。

逸見 私の認識では、そもそも立教時間は学生が入学時から卒業時までの正課および正課外の活動の記録を残すためのポートフォリオとして作られた経緯があるのではないかと思います。ですから、いわゆる LMS として使うとなると少し機能が違うのかなと感じています。一方、職員の皆さんが学生に向けてお知らせなどを一斉送信するときは立教時間のほうが使いやすいのだろうとも思っています。2020 年度はレポート試験の提出が立教時間を使用するということがあったので、私は立教時間を使用しましたが Blackboard と比べて LMS 機能としては物足りないところがありました。

小田嶋 LMS がいくつもあるのは使い分けしにくく情報を見落としやすい面があると感じました。もしいくつかのシステムを同時に使っていくのなら、お知らせ機能が連携すると使い勝手が良くなるのではないかと感じています。

木田 ありがとうございます。我々も確実な情報伝達方法について探しているところです。

また、昨年のように情報がバラバラと送られるのではなく、ある程度集約しながら発信していくという、発信側のリテラシーも大事になると痛感しています。

メディアリテラシーの必要性



宇野 裕樹

ーオンライン授業の登場によって、大学教育も大きな変革を迎えていくのであろうと感じています。社会においても、テレワークによって仕事におけるコミュニケーション方法も大きく変わってくるのではないかと思います。そうした時代を迎えるにあたり教員や職員、学生にはどのようなスキルが必要になってくるのでしょうか？

逸見 ようやく 2020 年度の授業を終えたところですが、苦労を重ねた結果、すべての教員がやっと ICT を

活用する教育の入り口に立つことができたのかなと思います。おそらく大学におけるICT教育の推進に関しては、新型コロナウイルス感染症によるオンライン授業実施がなければ素通りしていたのではないのでしょうか。

教職課程には兼任講師が60人ほどおりますが、中にはワードしか使ったことがないという教員もいます。しかしそうした先生方も秋学期末には、誰の手も借りずにお一人でZoomを使って授業ができるようになりました。オンライン授業は「教育における黒船だ」などとも言われましたが、授業を行うために必要なのだと思えば苦心しながらも新しい技術を身に付けていけるものなのだと思われ、自分自身を振り返って思います。

LMSの操作は今後、授業を行う際の教員の基礎リテラシーになると思います。対面授業であっても、授業資料の配付や授業内課題の提出とその管理などはLMSを併用することができるかと今年度を振り返って思いました。

ところで、教職課程では、中・高での実際の授業を想定して3年次の秋学期に「教科教育法演習1」の授業で学生が生徒役、教師役をそれぞれ担当する模擬授業を行います。今年度の模擬授業は、オンライン授業の中でどのように行うかということが大きな課題でした。そのために模擬授業が可能なオンライン配信環境整備を検討し、大画面ディスプレイを設置し、教師役の学生だけが大学に登校して模擬授業を実施し、生徒役の学生は自宅にてオンライン受講するというスタイルをとりました。教師役の学生の感想としては、やはり自宅の小さなPC画面とはまったく違い、生徒役学生の表情や動作などがはっきりと分かり臨場感のある模擬授業が行えた、と言っていました。オンライン授業を効果的に行うにはインフラを整備することも大切なのだと思います。

また、ICTを用いてより授業を充実させるためには学生の主体的授業参加も必要です。オンライン授業では学生は顔を画面に映さないことが多かったのですが、授業を行う側からするととてもやりやすかったです。学生の表情や態度は授業者にとっては、授業内容が伝わっているか、もう少し深く掘り下げていいのかどうか、など授業の手伝えを得る手がかりになります。表情などが分からないままオンライン授業をするのは、オンデマンド型の授業と変わらないともありました。学生と教員の信頼関係の問題もあるかもしれませんが、今後は学生自身も授業に主体的に参加する、自らの授業参加によって教員の授業内容をさらに深めることができるという意識を持ってもらえたらうれしいです。教員も今後オンライン授業の実施方法を検討するときは、学生側の授業参加スタイルを含めた形を考えていかなければならないのだらうと思います。

木田 授業サポートの側面から言いますと、教室のインフラ整備は非常に重要だと思っています。メディアセンターとしても、この春、次年度の授業に向けてディスプレイやスピーカーフォンの導入を予定しています。そしていわゆるミックス型授業にも対応できるよう整備を進めていきたいと考えております。

今年度はとにかく授業を成立させるところに重きを置き、授業内容の質的な向上まで目が行き届かなかったところがあります。ただし、秋学期で教室が利用できるようになっ

た時点で、ある程度、オンラインで映像資料も配信可能になるなど、少しずつ授業内容の改善に向けた取り組みもサポートできるようになりました。次年度も授業内容のさらなる改善に向けて先生方をサポートしたいと考えています。

小田嶋 私たちは SNS を使用することに抵抗のない世代で、なんでもダウンロードしたりスクリーンショットしたりして保存するのが当たり前になっていますが、メディアリテラシーに関しては無知なところがあります。

例えば、ウェブ上にアップロードされた資料は、ダウンロードして自分の物のように自由に使えますし、Zoom で先生が映したパワーポイントの画面も、カメラやマイクをオフにしていれば、それをこっそり撮影しても先生には分かりません。提供された資料にも著作権があるということを知り、扱い方には気をつけなければならないと思っています。これから社会に出ていくうえで法律に反する部分も出てくるので、そうしたことは当然身に付けなければならないことだと思います。

逸見 デジタルネイティブ世代の学生に対してはメディアリテラシーをきちんと教育していくことが大切だと思います。例えば、今はインターネットがインフラ化し、SNS 全盛の時代ですから、自分の意見や主張を強化するような情報だけを入手しがちになる「エコーチェンバー現象」や、自分にとって都合のいい情報しか入手できなくなる「フィルターバブル」などの現象が起きてきています。このような状況では ICT や AI の利点だけではなく、それがもたらすリスクについても大学全体が向き合って教育を行うことも必要ではないでしょうか。全学共通科目の中にそうしたメディアリテラシーの授業があってもいいのかなとも思います。

木田 新しいツールは雨後のたけのこのようにリリースされますので、学生に個別スキルの習得を求めるときりがないと思います。私も、先ほど逸見先生がおっしゃったように、まずはメディアリテラシーについて身に付けることが必要だと思います。

例えば、本学ではあまりなかったのですが、Zoom が流行し始めた当初、授業に第三者が乱入して妨害される、いわゆる「Zoom 荒らし」が起きました。「Zoom 荒らし」は Twitter など誰もが閲覧可能な Web サイトに Zoom 会議の URL を公開したために起きてしまったと言われています。最近では Twitter や Instagram などの SNS を利用して気軽に情報発信できますが、そうしたところからも個人情報が流出してしまうケースが非常に多くなっています。

ICT の技術的な面より、SNS の危険性を理解したうえで情報を発信すること、そして自分の発信した情報内容にも責任を持つことなど、基礎的なメディアリテラシーを身に付けることのほうが重要だと考えています。加えて、フィッシングメールなどによる詐欺行為にも、自分では引っかけられないと思って引っかけられてしまうこともあるので、セキュリティ意識も身に付けていただきたいと思いますね。

ウィズ、アフターコロナ時代に求められる学びの姿

—最後に今年1年間を振り返り、そして来年度に向けて、それぞれ一言ずつメッセージをお願いします。

逸見 私は他大学でも非常勤講師をしていますが、都内のいくつかの大学では、インフラが整わないなどの理由からオンライン授業ではなくオンデマンド型授業であったり、毎時レポート課題を出すという形や、教科書をもとにレポートを提出させるという形をとったところが意外と多かったようです。限られた比較の中ではありますが、立教大学はかなりレベルの高いオンライン授業を全学をあげて学生に提供することができていたように思います。これは学生たちの学びをいかに質を落とさずに継続させるかについて、すべての勤務員が気持ちをひとつにしてやってきた成果だと思っています。また、本日のようにこうした振り返りを行うことも2020年度の体験を次年度以降につなげていこう、本学としてのオンライン授業の経験を高め共有していこうという現状に対する意欲があるからできることではないでしょうか。

ところで、この1年オンライン授業を行ってきて感じるのは、学生や勤務員がキャンパスに集うことの意義は「偶然と出会う」チャンスがあることだと思います。例えばキャンパスで誰かと出会って、「やあ元気？」と話しかけ「そういえばあの件けどどうなっている？」とコミュニケーションが生じる。キャンパスでの活動ではこうした偶然の中でもたらされる情報共有や情報交換がありますが、これはZoomを設定して、時間と



参加者を決めて・・・というオンラインではできないことです。偶然性がなくなるのがオンラインの特徴です。

話がそれますが、「偶然性」は、キャリア教育でもその重要性がよく論じられています。クランボルツというアメリカの心理学者は「キャリアの80パーセントは偶然から作られる」と言っていて、その偶然を計画的に作っていくことが大事だと述べています。これは計画的偶然性理論と呼ばれています。今後、大学は学生のキャリア形成のためにも「偶然性」をいかに作っていくか、そして学生も安全性を確保しながら自ら偶然と出会う機会をいかに作っていくかが重要だと思います。

授業も偶然と出会う大きなチャンスです。全学共通科目で展開する3,000科目は学生が3,000回の偶然と出会う機会でもあるので、それをオンラインと対面とでうまく使い分けていく方法を、学生も巻き込んだ形で一緒に考えていくことができると、より立教らしいリベラルアーツ教育を実現できるのではないかと考えています。

もうひとつ、キャンパスに集うことの意義としては、「五感+α」で物事を感じることがあげられるのではないのでしょうか。それは自分自身の視覚や聴覚に加えて嗅覚や触覚や直感などの感覚を使って相手の状況を感じ、そして理解していくことです。オンラインでは画面を通して相手の顔が見えますが、それはただ「見る」だけであって、「出会う」のとはまったく質が違うと考えています。

また2030年には、今の職業の約4割がAIに取って代わられるとも言われています。もちろん新しく生み出される職業も出てくるでしょう。このような大きな変化に直面する時代で大事なのは、あくまで主体は人間であり、AIやICTはそれをアシストするツールであることをしっかり意識することだと思います。また、人間本来の特性やアナログの利点についても改めて考えていかなければならないでしょう。

木田 今年度オンライン授業を実現することができたのも、先生方、学生の皆さん、メディアセンタースタッフをはじめとする職員が一致団結して協力した成果だと思います。改めて感謝を申し上げたいと思います。

今年1年間、業務を通じて改めて人に感謝する気持ちやチームで仕事をする事の大切さを学びました。業務に関して言うと、これまでは自分の担当分だけをこなしていればいい、という気持ちがどこかにあったと思います。しかし今回のオンライン授業サポートを通じて、私一人だけでは何もできないということを実感しました。仕事への向き合い方、先生方や学生の皆さんへの向き合い方についても自分を見つめ直す1年間でもありました。今回の座談会ではこうしたことを改めて考える機会を与えていただきありがとうございました。職員同士だけではなかなか気付かないこともあるので、先生や学生の皆さんとこのように定期的に情報交換の機会を設けられると良いですね。

小田嶋 他大学の友人からは、ほとんどの授業がオンデマンドという話を聞きます。私は立教大学でオンラインでありながら双方向の授業を受けることができ、恵まれている

と感じています。また、オンライン授業になったことにより、池袋と新座キャンパス間の移動の必要性がなくなり、昨年までは取りたい授業があっても移動時間がないという物理的な制約から、取るのを諦めなければならぬ科目も履修できるようになりました。また課外活動やプライベートのスケジュールとも組み合わせやすいというのもメリットだと思います。

正直なところ、今後対面が再開するのはうれしい反面、オンライン授業と並行して受ける際のバランスや効率を考えると少し戸惑う部分もあります。オンライン授業に慣れてしまったせいか、例えば週1回の対面授業があったとすると、「それだけのためにキャンパスに行かないといけないのか」と思うところもあると思うのです。

今後どんな授業を履修するかは、先生から直接熱を感じられる対面の利点と、場所を問わずに受けられるオンラインの利点をいかにバランスよく組み合わせていくかがポイントになると思います。また、オンライン化が進めば、先ほどの逸見先生のお話にもあったように、偶然が生まれにくく人との関わりも少なくなってしまうので、自分から積極的に人と関わっていく姿勢やコミュニケーションを深めていく力を養わなければならないと感じています。

グループワークが多く、同じ空間で一緒に受けるからこそ何かが生まれるような授業ではやはり対面で積極的に受けたいと思います。先生が一方通行で話をするようなオンライン授業も、学生がチャットなどによってリアクションできる機会がもっと生まれたらいいなと感じています。学生としても、授業中はただパソコンに向かって座っているだけではなく、もっとアクティブな姿勢で学んでいかなければならないなとも思います。

一本日は教員、職員、学生それぞれのお立場からの意見をお聞きすることができ大変参考になりました。立教大学には「教職協働」という言葉があり、教員と職員が連携・協力して大学運営業務を遂行することを指しています。本日のお話を聞いて、今後は、特にこのオンライン授業の在り方を考えていくうえでは、学生の視点も取り入れて検討していけたらいいのではないかと思います。

本当にありがとうございました。



小田嶋 澄